

樋口秀雄先生をお送りする

中 井 農

先生は長野県松本市のご出身である。新制となつてほどない松本県ヶ丘高等学校を終えられ、1950年、同志社大学の教養部に入学された。英語好きの文学青年は、当然のように文学部英文科に進まれ、ついで、修士課程を修了された。この時代は、府立山城高校での教員生活と重なる。夜間部の生徒との交流は先生にとっては嬉しい思い出となった。1963年に立命館大学に奉職されたが、1967年に本学法学部助教授となられて以降、29年にわたって同志社大学での教育と研究に専念され、1993年に発足した言語文化教育研究センターの名誉教授として、いま、先生をお送りすることになった。

先生は、学生として、戦後の大学改革のもとに学ばれ、教員としては、大学設置基準大綱化の波を経験された。他方、いつも担当を希望されていた二部は、この春から、昼夜開講制度に移行することとなり、同志社は新たに変貌を遂げようとしている。そして、学生運動の変容。

法学部に移られたのは、70年安保を挟む大学紛争前夜であった。先生は、2年間の教務主任を挟んで、3年つづいて学生主任の任にあたられたのである。茶目っ気と正義感とが奇妙に調和した30歳代後半の血気盛んなお姿が想像される。お宅には、いまでも赤と白のヘルメットが記念品として仕舞つてあるはずである。もうひとつが、古ぼけた小さなサイドテーブルである。これは、ずいぶん前にわたしが頂いて、いまでも使っている。積み上げた本を横に移動してながめて見ると、研究室を占拠した学生がデコラ張りの表面にマジックインキで青々と書いた文字は、さすがに色あせて、判読できなくなっている。その後、1979年には学生部長を務められた。田辺移転問題にか

かわる激しい学内紛争のたけなわであった。晩秋、明德館前の団交。学生たちに取り巻かれて仮設の壇上に座っておられたお姿を思い出す。そんなに古いことではないのだが、その場面の記憶には何故かあざやかな色彩が欠けている。とにかく、寒い日であった。

わたしが同じく法学部に籍を置くことになったのは1974年で、先生にお会いしたのは、アーモスト大学から在外研究を終えて帰国されたその秋であった。その前から、「あのとき樋口さんは……」「樋口さんが……」と、いたるところで耳にして、これは大変な人らしいと思っていた。事実、大変な人であった。それ以来のおつきあいだが、愉快な逸話・秘話は数え切れない。差し障りのない例にかぎって言えば、その頃からすでにそうだったけれど、「先生。先生の名前、何ていったけね」と、当人を前にして尋ねられるのである。この被害を免れえた人はあるまい。被害は、名詞一般にまでおよぶ。わたしたちが樋口先生のお名前を拝借した動詞を使いはじめたのは、そのためである。

先生のご研究はアメリカ文学と文化を中心とする。そのお仕事にはいくつかの側面がある。出発となったヘンリー・ジェイムズ研究には、文学論一般へ、また、アメリカ文化論へと裾野が広がってゆく契機が含まれていた。エマソン論はその転回点にあると思われる。そして、アメリカ1930年代の政治と文学、知識人に関する一連の論考は、新聞・雑誌をはじめとする第一次資料を駆使した重厚なもので、先生のお仕事の中心をなすものである。他方、1982年にふたたびアーモスト大学に赴かれる前後から、先生の関心は「文学とスポーツ」に向かう。ポピュラー・カルチャーが正当な研究対象として受け入れられつつあるが、これは、いまなお新しい分野である。この分野でのお仕事は、近年、矢継ぎ早に出版されている共著の論考や翻訳書にも反映されることになった。日本アメリカ文学会、アメリカ学会で活躍される他、1984年以降、アメリカに拠点を置くスポーツ文学協会の機関誌『アスロン』の、インターナショナル・エディターでもある。

教育の面では、曜日講時や教室を間違えられることが屢々あったが、ベルと同時に授業を始められるという、教師の鑑であった。英語科目主任、また、かつての一般教育委員長を務められた。1990年からはアーモスト館長の任にあたられた。思わず息を呑むような緊張の場面さえ、先生のこぼれるユーモアが一瞬にしてそれをほぐしてしまう。これは天性のものだから、真似してできるものではない。

数あるお仕事のなかでも、アーモスト・サマープログラムの立案と実施の労は特筆されるべきである。カリキュラムの一環として取得単位を与えると
いう発想は、1979年発足当時ですら、他大学にその例を見ないものであった。このプログラムはその後、ドイツ・イギリス・フランス、そして次年度から始まるスペイン・中国へと充実したが、その先鞭は先生によってつけられたのである。

先生は、言文センター発足に伴い、初代の所長を務められた。まったく新しい組織の編成、教授会運営の確立、さらには対外的な折衝と、激務の2年間であった。巧まざるユーモアは一貫して失われることはなかったが、わたしたちが驚いたのは、この期間中、先生があまり「ひぐちラレル」ことがなかったことである。いかに緊張を強いられる要職であったか、思いをあらたにする。

もとに戻られてほっとしたのも束の間である。停年を定めた就業規則によるとはいえ、ご退職は、なんとも寂しい思いがする。ご活躍をお祈りするばかりである。ありがとうございました。